

2022年10月23日

説教「神の前に豊かに」ルカによる福音書12章13～21節

牧師 小林 恵

人間の所有欲は、とどまる場所を知りません。所有する物質や金銭そのものが悪いのではありません。問題は、それを扱う人間の心にあるのだらうと思います。

この事を、2千年前、主イエスは厳しく諭されていました。ルカによる福音書12章13節以降は、それをはっきりと記しています。事の発端は、ある一人の人間の要求でした。「先生、わたしにも遺産を分けてくれるように兄弟に言ってください」。

私たちは時に、身勝手な願いを神に訴え、祈ってしまう時があるかも知れません。それが悪いとか間違っているというのではなく、むしろそのように祈らざるを得ないこともあるのだらうと思います。それが祈りであるからです。しかし、身勝手な願いを確かに聞いてくださる神が、その願いどおりに導いてくださるのかどうかは別問題です。祈りは、私たちの願いを実現させるための手段ではなく、私たちの身勝手な願いを聞いてくださる神に、御心が行われるように願うこと、それが祈りなのです。

「だれがわたしを、あなたがたの裁判官や調停人に任命したのか」。主イエスは、要求者の願いに応えることを拒否されました。自分の欲望を満たすために、あたかも神を利用してしまふような願いに対して、主イエスは断固としてこれを拒否しておられます。そして15節でこう言われているのです。「どんな食欲にも注意を払い、用心しなさい」。食欲に注意を払い、用心せよと諭される主は、その食欲という危機から私たちを救い出してくださいませ。

そのために、主イエスは一つのたとえ（16節～）を話されるのです。有り余る豊かさの中で、人間がどのようにして食欲な思いへと向かって行ってしまうのかを、このたとえははっきりと語っています。逆を言えば、もし“食欲”を抜きにすれば、このたとえの意味はわからなくなってしまうということでもあります。つまり、このたとえの中で、金持ちは何も悪くはないのです。法に背くこともしていなければ、人に対して迷惑や損害を与えているのでもありません。ただ豊かであったこの人の畑が豊作であり、その実りを貯蓄しておくスペースがなかったのも、もともとあった倉を壊してさらに大きい倉を新たに建てようとしていたに過ぎません。むしろ、個人の財産を大切に管理しておくことを考えた真つ当な生き方ではないのかとさえ思ってしまう。人間社会の視点で考えれば、何が悪いのかと疑問をもたざるを得ないのです。

しかし、神の視点からすれば、この金持ちの言動は御心ではないと言わざるを得ません。問題は、この人の豊かさでも、豊かに実った作物でもありません。つまり人間のもてる金銭や財産が問題なのではなく、むしろ自分の都合のために、もっともっと欲しいと願ってしまう、人間の“食欲”にあると言えます。たとえの中の金持ちは18節で、「もっと大きいのを建てよう」と計画していました。まさに食欲の思いが、ここに芽生えていたのです。

「食欲」の「食」という漢字を見ると、「今」と「貝」からできているのがわかります。つまり、今、貝という財産を既にもっているとするならば、ここに、もっともっと欲しいとむさぼっていく食欲の根が、既に芽生え始めているということでもあります。腹八分目どころか、腹一分目を持っていれば、すでにそこに食欲の根があるということなのです。ゆえに、私たちは皆もれなく、食欲の誘惑の中

に置かれているという事実を、この「食」という字は暗示しているとも言えます。

一方、この「食」の対極にあるのが、「貧」という漢字であるように思います。これは、「貝」を「分」けると書きます。つまり、財産である貝を他者と分かち合っていくゆえに、自分は貧しくならざるを得ないということであろうかと思えます。まさに、貝という財産を自分のためではなく、他者のために、隣人のために分かち合っていく生き方です。ここにこそ、食欲に注意せよと言われた主イエスの言葉の本当の意味があるのだと思えます。

食欲の出発点は、神の前から離れてしまうことです。17節で金持ちは、「どうしよう」と考え、問いかけています。ただし、その問いかけは自分自身に対してでした。ここに、食欲の心が芽生えてしまったと言えます。そして、決定的なのは19節「こう自分に言ってやるのだ」と、金持ちは自分自身で答えを見出し始めていました。直訳すると、「自分の魂に、こう言い聞かせてやるのだ」です。「食べたり飲んだりして楽しめ」という、金持ちが心に抱いた内容が問題なのではありません。むしろ、「どうしよう」と自分の魂に問いかけ、その回答を自分自身の中に見出してしまったことに、この人の決定的な過ちがあったのです。

これに対する神の答えはいたって明瞭で、それは、自分の命が取り上げられてしまうという最悪の結末でした。取り上げられる命は、神が創造され、神から与えられている尊い賜物です。命は私たち自身のものである前に、神のものなのです。ゆえに、いつの日か神に返されていきます。同じように、金持ちが収穫した豊かな実りもまた、神に返されていくべきものだったのです。

金持ちは「どうしよう」と自分自身に、自分の魂に問いかけましたが、私たちは“どうすればよいですか”と神に問いかけ、神に祈り求めていかなければなりません。神の前に豊かに生きる人生とは、とりもなおさず、神に祈り求めていく人生です。“あなたの働きのために必要なものをお与えください。そして今、もてるもので何ができるのかを示してください”と、神に祈る日々でありたいと思いません。

主イエス御自身、その貴い命をささげられることによって、全世界の人々の命を豊かにしてくださいました。神は、その日その時に私たちが必要とするものをご存じであり、それを相応しい形で与えてくださいます。日々与えられる豊かな恵みを感謝して分かち合い、神の働きのためにささげて生きる、神の前に豊かな人生でありたいと願っています。そして、そのために、神に祈り求めていく歩みでありたいと思えます。